はじめに

このたび当冊子「木野山さま　―家庭の神まつり―」を増刷する運びとなり、これを機に木野山神社の信仰・伝承・歴史について大幅に加筆し、また全体を通して読みやすいよう体裁を整えました。

今後も、当冊子がみなさまのご家庭での神まつりの一助となりますよう、より充実した内容を目指し、編集を続けていく所存です。

内容は十分慎重を期しておりますが、なお調査・研究を要する点もあろうかと存じます。崇敬者各位におかれましても、お気づきの点がございましたら、お知らせ頂ければ幸甚です。

平成一九年四月二二日

木野山神社 宮司 重松 修

敬神生活の綱領

神道は天地悠久の大道であって、崇高なる精神を培ひ、太平を開くの基である。
神慮を畏み祖訓をつぎ、いよいよ道の精華を発揮し、人類の福祉を増進するは、使命を達成する所以である。
ここにこの綱領をかかげて、向ふところを明らかにし、実践につとめて、以て大道を宣揚する事を期する。

一、神の恵みと祖先の恩とに感謝し、明き清きまことを以て祭祀にいそしむこと
一、世のため人のために奉仕し、神のみこともちとして世をつくり固め成すこと
一、大御心をいただきてむつび和らぎ、国の隆昌と世界の共存共栄とを祈ること

神社本庁は、昭和二十一年二月三日に、全国の神社の総意のもとにその事務機関として設立されました。当初、神道教学の大綱として、①天照大御神の道であること、②天皇の天下をしろしめす道であること、③四海にゆきわたる道であること、④まことの道であること、という四項目を掲げていました。その教学方針をより具体的に、神社界のみでなく、広く一般に至るまでの理解を及ぼすべく、同三十一年五月二十三日、本庁設立十周年の席上において、前掲の綱領が宣言されました。

この宣言はあくまでも綱領であって、教義の謂ではありません。古来よりの信仰的要点を列記することによって指針を立て、生活実践の中の拠り所の確立を表明したものといえます。

神道の精神を最も適切に表明したこの綱領が、みなさまにとって精神的指針となり、豊かな敬神生活を送られることを願ってやみません。

1　木野山神社について

主祭神　素盞嗚命（すさのおのみこと）（防衛の神）
大山積命（おおやまづみのみこと）（山の神）

配　神　少名彦命（すくなひこなのみこと）（国造り・医薬の神）
豊玉彦命（とよたまひこのみこと）（怨霊怨敵退散の神）
高龗神（たかおかみのかみ）（雨の神）
闇龗神（くらおかみのかみ）（〃）

例大祭　一月十六日（実施日は一月の第三日曜日）

講社祭　四月十六日（実施日は四月の第三日曜日）

祭　日　毎月六日・十六日・二十六日

当木野山神社は、国造りをはじめ、我が国の総ての産業の基礎となっている農業に関係があり、我々の日常生活の上に欠くことのできない右記の六柱の神々が鎮座なされております。

特に、豊玉彦命は怨霊怨敵退散の神として、往古より御霊験が特に顕著なるものとして広く尊崇の的となっております。かつて、大萩馬太郎という著しく霊感の優れた信者があり、ある夜、夢枕に立たれた大神様が「これより後、この八尾の大狼をもって我が眷属となし、神意を伝う」とのお告げをいただいてより、大狼は大神様のお遣い役として御神言を霊験者に伝授たまわり、各種の祈願は、更に多くの人々の上に厚いお恵みをお授けくださるようになったと伝えられています。

以来、歳月を経るごとに大神様の御神徳は益々高まり、崇敬者も年々増加し、毎月の六日、十六日、二十六日の祭日には、県内はもとより遠く中国、九州方面からも大神様の御神徳を頂かんと、多数の方々が参詣しご祈願をなされています。

当神社は深山高所に御鎮座し、大気清新な環境は心身の健全の為にも好適地です。昔諺にも「病は気から」という例えのあるとおり、この清浄な御神域で風光明媚な風景を眺め、清々しい大気を吸い、その上に大神様のあらたかなる御神徳を戴ければ、悩める心も晴れ、迷いも解け、病める心も治癒し、再び元のように元気な心身に立ち返ることに疑いはありません。

大神様は、いつもあなたと共に在り、あなたの心の中に生きて、あなたを護っていて下さるのです。大神様を信じ尊び、お恵みにおすがりして一心にご祈願することが、やがて大神様に通じるものです。そしてそのお恵みに対して心からの感謝をすることが最も大切なことです。あなたが大神様の御神徳に心からおすがりすれば、大神様は決してあなたを見放すことはないものと信じます。

なお、当冊子は皆様が日常神様をどのようにおまつりすればよいか、また、日常の生活の中でどんなおまつりをしなければならないかを簡単に記してみました。神様を信仰する中で是非参考にしていただき、正しい神まつりをして下さい。

ご祭神について

素盞嗚命

素盞嗚命は、古事記では黄泉の国より戻った伊邪那岐命（いざなきのみこと）が禊（みそぎ）をした際、鼻をすすいで産まれたとし、日本書紀では伊邪那岐命と伊邪那美命（いざなみのみこと）の間に産まれたと記されています。三貴子（みはしらのうずのみこ）の末弟で、伊邪那岐命より「大海原＝地上の世界」を統治することをいいつけられましたが、母伊邪那美命の元、根の国に行くといい、父の怒りを買います。素盞嗚命は根の国に赴く前に高天原に姉天照大御神を挨拶に訪ねますが、天照大御神は弟が攻め入ってきたと思い、武装して迎え撃とうとします。素盞嗚命は「誓約（うけひ）」により、身の潔白を証明しますが、その後の粗暴な行動により天照大御神は天の岩屋にお隠れになり（天石窟の変）、素盞嗚命は高天原から葦原中国に追放されてしまいます。葦原中国の出雲に下った素盞嗚命は、その地を荒らしていた八岐大蛇（やまたのおろち）

を退治し、尾からでてきた天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）を天照大御神に献上します。その後、櫛名田比売（くしなだひめ）を妻とし、出雲の須賀の地に赴きそこにとどまったとされています。

また、牛頭天王（ごずてんのう）は、もともとはインドの祇園精舎の守護神が素盞嗚命と習合したものです。この牛頭天王・素盞嗚命に対する信仰は祇園信仰といい、中世までには日本全国に広まり、八坂神社・津島神社・氷川神社でお祀りされていました。これらの神社は明治時代の神仏分離経て素盞嗚命をお祀りする神社となりましたが、天王洲アイルの「天王洲」を始めとして、各地にある「天王」のつく地名の多くは牛頭天王に因むもので、今日にも過去の神仏習合の歴史が多く残っています。

大山積命

記紀神話には神産みにおいて伊邪那岐命、伊邪那美命との間に生まれたと記され、和多志大神とも申し上げます。お名前は「大山に住む」の意で、山の神であることを表しています。また和多志大神の「わた」は綿津見のことで海の神であること表しており、すなわち、山、海の両方を司る神です。

なお、素盞嗚命の妻、櫛名田比売の父母、足名椎（あしなづち）命・手名椎（てなづち）命は大山積命の御子とされています。

少名彦命

古事記では、神皇産霊神（かみむすびのかみ）の、日本書紀では高皇産霊神（たかみむすびのかみ）の御子とされています。

体は小さく敏捷、忍耐力に富み、大国主命と協力して国土の経営、医薬・禁厭[1]などの法を創めたと伝えられています。

---

1 まじないのこと。

豊玉彦命

一般に豊玉彦命は海神（わたつみのかみ）といわれ、魚族・海草の藩植、海潮の満干、船舶の往来等大海に関する一切の主宰神であると共に安産の神と考えられています。

娘の豊玉姫命は、神武天皇の祖母神で、鵜茅葺不合命（うがやふきあえずのみこと）の母神、彦火火出見命（ひこほほでみのみこと）（火遠理命（ほおりのみこと）・山幸彦）の后神です。

当神社では、怨霊怨敵退散の神として崇敬を集め、邪気退散、病気平癒（流行病・精神病）にことのほか霊験があらたかであると伝えられています。

高竈神・闇竈神

闇竈神（闇淤加美（おかみ）神）の名前は、古事記及び日本書紀の一書で、伊邪那岐神が迦具土神（かぐつちのかみ）を斬り殺した所に出てきます。この時に剣を握った指の間から血が流れ出た時に生まれたとされています。

また高竈神は日本書紀の別の一書で迦具土神を斬って三柱の神になったとし、その内の一柱が高竈神になったとしています。

この二神は同一の神、あるいは、対の神とされ、その総称が淤加美神（竈神）であるとされています。竈は龍の古語であり、「闇」は谷を、「高」は山を指す言葉であることから、闇竈神は渓谷、高竈神は山峰の水や雨を掌る龍神として信仰されてきました。

竈神の神裔としては、娘に日河比売（ひかわひめ）、その子に深淵之水夜礼花神（ふかぶちのみずやれはなのかみ）がいて、この神の孫が大国主神になることが古事記に記述されています。

この二柱の神は、罔象女神（みつはのめのかみ）とともに、雨乞い・止雨・灌漑の神としてお祭りされています。

当神社には、竈神の神姿が狼である、という言い伝えもあります。

2　家庭における神棚の祀り方

神をまつるということは、神様に対して誠の心を捧げ、神様のご神徳を敬い尊んで、神様のお心を自分の心とすることで、その神様のご加護に対して報恩感謝の心をもつことによって、更にお恵みをいただき、平和と幸福な日々が過ごせるようにお願いするためのものなのです。

そのためには、正しい神まつりの仕方ということも大切なこととなりますので、神棚のまつり方について簡単に記してみます。

神棚の位置

一家の精神的中心になる神聖なところですから、清浄で静かな高い処で、また、家族が親しみやすく拝みよい処に、南または東向きにお祀りします。

しかし、西向きや北向きがいけないというわけではありません。このことは我々日本人の方角に対する考え方によります。

まず、東西は、それぞれ日が昇り、沈む方角であることから日々の暮らしの中で重要な方角とされてきました。

また南北は、中国の「天子は南面す」の語に現れているように、北にあって南に向かうことが君主の地位の象徴であるとして尊ばれ、我が国においてもその思想的な影響を受けたと考えられ、古くから儀礼の場において重要な方角とされてきました。

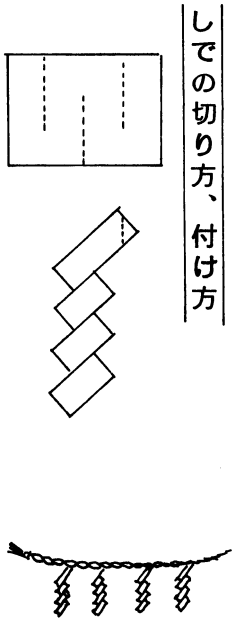
以上のことから、日が昇る方向である東向き、また、日中にもっとも陽光が降り注ぐ南向きにお祀りするのが望ましいと考えられています。

神座の位置

御神札を横に並べてまつるときは、中央を最上位とし、次は向かって右、その次が左となっています。従って、中央に天照皇大神宮大麻、向かって右が氏神様、左はその他の信仰する神社の御神札を奉安します。また、重ねてまつるときには、表に神宮大麻、次に氏神様、次にその他の神社の御神札をおまつりします。

注連縄

注連縄（しめなわ）は、太い根の方を向かって左、細い末の方を向かって右にして懸け（処によっては反対に懸ける処もあります）、紙垂（しで）は、半紙を縦横四分の一に切って横を四つに折り、その折目を交互に紙の丈のおよそ三分の二の深さに切ります。それを二枚ずつ重ねて、切った深さだけを順次に、向かって左の方から手前に折ります。その紙垂を四ヶ所、同じ間隔で注連縄にはさみます。注連縄にはさむ時は、その上端を折り折ったほうを自分の方に向けてつけます。



お供え

家庭の神棚に毎日お供えするものは、米・塩・水の三品が普通です。米はお洗米として供えるか、炊いたご飯を土器に盛りお供えします。塩は、土器に山形にして盛ります。水は水玉などに入れ、これらを三方にのせ、水玉は蓋をとってお供えします。三方は縁にとじ目のある方を手前に向けます。

また、毎月一日、十五日、氏神様のおまつり、お正月、祝祭日、家族の記念日等には、海川山野の物をとともに、清らかな器に盛ってお供えします。お供え物は後でお下げして、一家揃って楽しく喜んで分かち合いながら頂いて下さい。この喜びこそが神を尊び崇めるものだけが知る喜びであり、神に通ずるものであります。

なお、祖霊祭（みたままつり）には故人が生前の好物もお供え下さい。

3　神拝の作法

まず手や口を水で清め、衣服を整えて、心身共に清潔な気持ちで小揖（しょうゆう）（浅くお辞儀）して神前に（家庭では神棚の前）進みます。

席に着いたら深揖（しんゆう）（お辞儀）し、次に二拝（深く二度お辞儀）します。次に二拍手、次に一拝、席を立つ前に深揖し、最後に小揖し、神前から退きます。

玉串を捧げて拝礼する時は、別図の要領で玉串をあげてから、先に記したように拝みます。

神拝詞を奏する時には、二拝、神拝詞奏上、二拝、二拍手、一拝です。

正式参拝

正式参拝とは、神社へ参拝して行うおまつり（初宮詣、七五三詣、年寿祭等の各種祈願祈祷）の場合の正式な参拝の方法で、神職によって執り行い、玉串を捧げて拝礼するものです。

手水の使い方

①先づ左手を洗います。

②次に右手を洗います。

③次に左手に水をうけて口をそそぎます。

④終に左手を洗います。お祓を受けるときは、腰を折り頭をさげます。（約四十五度）

玉串のあげ方

①右手が榊の根本の方を持つように玉串を受ける。

②神前の案の前に進み、軽く一礼する。（約十五度）

③右手で榊の根本の方を手前に引き

④「の」の字なりに廻しながら

⑤榊の根本の方を神前に向け、案の上に捧げる。

⑥次に再拝（二拝）二拍子、一拝

神職にお願いしないで、自分たちだけでお参りすることを、抜け参りとか、かげ参りとか言われますが、神社参拝をする場合には、やはり正式参拝をして厳かにおまつりを行えば、自然に身も心も清々しく、一層意義のある参拝をしたと心に感じるものがありましょう。それと共に神様との結びつきも深まり、敬神の心も更に高まり、精神的な支えにもなることでしょう。

4　おまつりの準備物

斎竹と注連縄

斎竹（いみだけ）というのは、おまつりを行う処の入口、または、四隅に立てる葉の付いた青竹のことをいいます。そして、この斎竹に引渡す縄を注連縄といって、この縄には紙垂をつけます。

注連縄は、天照皇大神が天の岩戸をお出になられた時に引き延えたのを始めとして、神事の際には必ずこれを用いることとなりました。この場内は神聖な処とされるために竹を立て、縄を引き、紙垂をつけてその境界を示したものです。この縄は打たぬ藁を使用し、左縄になうものとされています。

神籬

神籬（ひもろぎ）とは、神社や神棚以外の場所で祭りを行う場合、臨時に神霊の憑ります御座（依り代）となるものをいいます。

神籬は真榊の幹長く、姿の美しいものを選び、白紙の太い八垂と苧（お）を細かく裂いたもの（木綿（ゆう））を添えて、神籬柱に結び目正しく結び付けます。

お供え物

家庭の神棚に毎日お供えするものは先に記しましたが、地鎮祭、新室祭、家鎮祭、その他特別なお祭りの時には次のものを揃えて下さい。（・印のものは最低限必要なお供物です）

・米
・神酒
・海魚　鯛（めでたいという意味も含まれる）
　海菜　こんぶ　わかめ　寒天　のり　など
・野菜　季節のもの　二・三種類
　乾物　かんぴょう　ふ　しいたけ　高野豆腐など
　果物　季節のもの
・塩
・水　少々

5　大神様と人生儀礼

大神様と崇敬者とのかかわり合い、触れ合いの機会は数え切れないほど沢山あります。民族の信仰である私たちの人生儀礼や、地域の人々の習慣となっている年中行事の主なものには次のようなものがあります。

家居に関するもの　・地鎮祭　・上棟、立柱祭　・新室祭（家移り）　・宅神祭（家鎮祭、家祈祷）

人生儀礼　・安産祈祷　・命名祭　・初宮詣祭　・七五三詣祭　・入学、卒業、就職祭　・成人祭　・結婚式　・着帯祭　・結婚記念祝賀祭　・厄除祭　・年寿祭　・報賽祭　・各種祈願

年中行事　・新年初詣　・どんと　・初午　・針供養　・雛祭　・立春　・端午の節句（菖蒲湯）　・田植祭　・大祓　・七夕　・風祈祷、虫祈祷　・八朔（はっさく）　・重陽（ちょうよう）の節句　・日待、月待祭　・秋祭り　・亥の子　・年越し

このように、なんと沢山の人生儀礼や年中行事があることでしょうか。この他、個人の様々な祈願を入れると、大神様と崇敬者のかかわり合いは数え切れないほどあります。それでも、人々はこれらの事を自然に実行しており、ひたすら大神様にお祈りをしてきています。

儀礼や行事

次に、これらの儀礼や行事を、更に詳しく説明していきます。

例祭

毎年の例によって、一年に一回、一月十六日[2]に行われる大神様のお祭りで、神社のお祭りの中でも最も重要なものとされています。

このお祭りは、氏子や崇敬者全員が神社に参拝し、御祭神の徳を称え敬い、御神徳に感謝すると共に報謝の心を捧げなければなりません。

大祓式

大祓式は、昔から心身の清浄潔白を重んじる我が国特有の行事で、記紀神話にみられる伊邪那岐命の禊祓（みそぎはらい）を起源としています。毎年旧暦の六月と十二月の晦日に行われていましたが、現在では、七月と十二月の晦

[2] 例祭実施日は平成十八年より第三日曜日に変更となりました。

日に行われています。

この行事は、神様にお祈りして、今までの罪穢れを祓い去っていただき、また、自らを振り返り、新たな清らかな心身で明日からの生活に元気で取り組むためのお祭りです。

七月の大祓式を夏越（なごし）の祓と呼びます。人形（ひとがた）に、年齢・干支・性別を書き、前夜敷き寝をして、翌日身体をさすり、三度息を吹きかけて心身の罪穢れをこの人形に移し、大祓の当日に納めて身に付いた穢れを祓い、無病息災を祈るため、神社の前の茅を束ねた茅（ち）の輪（わ）を三回くぐりながら「水無月の夏越の祓をする人は千歳の命のぶというなり」と唱えます。

十二月の大祓は年越しの祓とも呼ばれ、新たな年を迎えるために心身を清める祓です。

地鎮祭

トコシズメノマツリといい、家を建てるときに、その土地を祓い清めて、氏神様やその土地の神様をまつり、その御神徳によって、その土地が永遠に禍や障りがないよう、また工事が安全に終わることを祈願するためのお祭りです。

建築を行う際には是非しなければならない大切なもので、家族は勿論のこと、建設に関係する人々も列席して工事の安全完成を祈願します。

敷地の四方に竹を立てて、注連を張りめぐらし、中央に祭壇を設けて神職によって執り行われます。

準備するものは、笹竹四本、注連縄（二十メートルぐらい）、清浄な砂、お供物が必要です。（おまつりの準備の項参照）

立柱祭・上棟祭

ハシラダテノマツリ、ムネアゲマツリといい、元来は立柱祭と上棟祭とは全く別の祭事でありましたが、現在では、立（建）前と称して、両方のおまつりを併せて行っている場合がほとんどです。

立柱祭は家の形を造る第一段階の意義あるお祭りであって、昔は斎柱（いみはしら）または心之御柱（なかのみはしら）といって家の中心の柱のことで、俗には大黒柱（大極柱）と言われる物を建てるときに行われるお祭りです。

上棟祭は、新築の落成を祝う共に、落成に至るまでの神様のご加護に対して感謝報賽をし、また将来も過災のないようにお護りを祈願するお祭りです。

昔は神職によって執り行われておりましたが、現在は、大工さんによってまつられ、工匠にとっては最も重要な儀式として丁重に行われております。

新室祭（家移り）

俗に言われる家移りのことで、神様のおかげで新しい家が無事完成し、この家へ移り住むことができるようになったことに感謝し、報謝すると共に、祝いの心も表し、この新築の家の安全を永久に守護していただくことを祈願するお祭りです。

家を建てるにあたって、地鎮祭を始めのお祭りとすれば、上棟祭が中のお祭りであり、新室祭は終わりのお祭りであります。これらは一連の関係のあるお祭りで、どれも家を建てるうえで大切なお祭りです。

最近は、地鎮祭だけを行って済ます家もありますが、上棟祭や新室祭は、地鎮祭で祈願したことの成就に対して報賽の意味が含まれているお祭りですから、地鎮祭と共に、是非行わなければならないお祭りです。

宅神祭（家祈祷）

ヤカツカミノマツリといい、家の内外に鎮まっておられます総ての神様をおまつりして、日頃のご加護に感謝すると共に、清らかな心で毎日を楽しく暮らせるようにお祈りするものです。

昔は毎月このお祭りをしていたようですが、我々もせめて一年に一度はこのおまつりをし、家の内外の神様に我が家の無事安泰を祈り、諸々の穢れを祓い清めて、感謝と清浄な心で明るい毎日の生活を過したいものだと思います。

また、古い家を買ったり、借りて入居する場合にも、このお祭りをするようにおすすめします。

日待祭・月待祭

日待祭と月待祭とは関連したもので、共に日や月に事依よて神明を崇敬するお祭です。日待、月待の「待」は、祭を意味するものであって、日の神、月の神をまつって、その恩頼に報謝するものであります。

日待祭は、俗に「お日待」と言われ、正、五、九月の中の吉日を選んで年に三回行い、部落や近所の人々が集まり、当番の家送りにしてまつる処が多くみられますが、これを毎月行っている処もあります。

近頃は一年に一度、正月に行う処が多くなっています。

古来は、夜を徹して日の出を待つという言い伝えがありますが、これは「待」の字を重視したためのものであって、待を祭とすれば、必ずしも日の出を待つことはないのです。

月待祭は、三日月待、十七夜待、二十六夜待などがあり、その祭の意義は日待祭とほぼ同様ですが、祭を行う時刻を月の出を待って行う習慣の処もあります。

田植祭

我が国は太古から農業が総ての産業の基となっている農業国であるために、代々の天皇は農業を奨励せられ、農業に力を入れてこられました。特に主食たる米の生産については格別の関心をよせられ、そのために、この田植祭は大変重要な行事として行われ、神聖な童女が五月女として田植えをご奉仕することになっており、稲の豊作を祈願するお祭です。

風祈祷・雨祈祷・虫祈祷

いずれも年穀の豊作を祈願するお祭で、風祈祷は二百十日や二百二十日などの風害にあうことのないように、また、雨祈祷は穀物のために適度な雨が得られますように、虫祈祷は穀物に悪い虫が付かないようにということで神様のご加護をお祈りするものです。

人生儀礼

続いて人生儀礼についてのお祭りを記してみます。

安産祈祷

お産は、人類が栄えていく上において公然的な事実ですが、このお産が神様のご加護によって、母子共に健全で苦しむことなく、無事生み終えることができるようにお祈りする祭事で、生まれてくる子供にとっては大神様と関わりを持つ最初のお祭です。

命名祭

神様からの授かりものの子供は、両親の子供であると同時に、いわば、神の子でもありますので、生まれた子供には長寿多幸を願って名前をつけていただくのが最良です。

初宮詣祭

子供の誕生に際しては、命名やお七夜（しちや）、お食い初めや初節句など。成長の無事を願う様々な行事が行われます。

こうした中で、初宮詣祭は、誕生後初めて大神様の御前に詣でて、大神様のお恵みによりこの世に生を受けたことを感謝し、将来も大神様のご加護によって心身ともに健全で、正しく明るく素直な人間として成長するようお祈りするものです。

新生児が公的な場に外出する最初の機会ということもあり、華やかに行われる行事となっています。

このお宮参りは、地方によりいろいろ異なりますが、当地方では、男児は三十二日、女児は三十三日目に行うのが普通とされています。現在は特に厳密ではなく、期日以後の良き日を選んでお参りする方が多いようです。

処により、百日詣、百二十日詣等もあります。

七五三詣祭

昔は十一月十五日に行われ、男女三歳は髪置（かみおき）といって頭髪を伸ばし始めることを、男児五歳で袴着（はかまぎ）といって初めて袴を着用することを、女児七歳で帯解（おびとき）といって幼児用の帯を解き大人用の帯を用いることを表す子供の成長を社会的に認知するために行われてきた通過儀礼を起源としています。

現在では、十一月十五日前後の土日祝日や吉日を選んで晴れ着を着せてお宮詣をし、大神様のご加護に感謝し、将来の健康幸福をお祈りいたします。

入学・進学・卒業・就職奉告祭

教育に関するお祭は昔から行われ、入学、進学、卒業などに際して、この事を大神様に奉告し、学業の達成をお祈りしていましたが、特に近年は教育が盛んになり、良い学校、良い勤め先への希望が強くなり、奉告祭よりも、入学・就職の祈願祭が多くなってきています。

成人式

昔は成年式・加冠式といわれ、古くは元服とも言われました。この式は祭事ではなくて、一つの儀式でありましたが、加冠式が終わって後、その旨を大神様へ報告するもので、七五三祭と同じような意味をもつものであります。

結婚式

冠婚葬祭という人生の三大礼のうちの一つで、その中でも結婚式は一家を創立する最も重要な儀式です。

我が国では、遠く神代の昔、伊邪那岐命、伊邪那美命が八尋殿（やひろどの）で天御柱（あめのみはしら）をめぐって結婚式を挙げられましてから、皇室においては代々その儀式を神前で厳かに行われ、その旨を伊勢の神宮へご奉告なされておられます。

我々も神の血のつながる子供として、この人生最大の儀式を大神様のご神前で行い、夫婦の契りを奉告することは、子孫としての務めでもあり、第二の人生の門出に当たって一家の繁栄を祈願することは、崇敬者として最も意義あるものだと思います。

近年は、結婚式場で華やかな式が挙げられておりますが、これは本来の意味から考えると、あまりにも形式に流れすぎるきらいがあるように思われます。物質的な充足から精神的な充実へと生活改善が要望されている今日、結婚式のあり方を見つめなすのは意義深いことではないでしょうか。

着帯祭

先に記した「安産祈祷」と関連のあるお祭で、妊娠して五ヶ月目に安産祈祷と共に併せて着帯の祭事を行います。古くより吉日を選んで行われる例となっていますが、俗には犬のお産が軽いことに因んで、戌の日に行われる慣わしになっています。

結婚記念日祝賀祭

結婚の周年をお祝いするお祭で、諸外国では古くから行われていましたが、我が国では明治二十七年に、明治天皇の大婚二十五年を祝してから、民間でもこのお祭りをするようになりました。

主に行われるものとしては、満二十五年の祝い、銀製の祝い品を贈る「銀婚式」、満五十年の祝い、金製の祝い品を贈る「金婚式」があります。諸外国の習慣は別としても、おめでたいことでありますが、これも総て大神様のご加護によるものですから、お祝いをすると共に大神様へご報謝することも大切なことだと思います。

この他に、紙婚式（一年）・木婚式（五年）・錫婚式（十年）・水晶婚または銅婚式（十五年）・陶器婚式（二十年）・真珠または象牙婚式（三十年）・珊瑚婚式（三十五年）・緑玉または羊毛婚式（四十年）・紅玉または絹婚式（四十五年）・金剛石婚式（七十五年）等があり、それぞれの式名にちなんだお祝いの品を贈られています。

厄年

厄年の年齢は、人生の中でも、体力的、家庭環境的、あるいは対社会的にそれぞれ転機を迎える時でもあり、災厄が起こりやすい時期として忌み慎まれてます。

その歳に神様のご加護により災厄から身を護るため、神社に参詣をして、災厄を祓う厄払いの儀（厄除け）が行われます。厄年の年齢は「数え歳」で数え、一般には男性が二十五・四十二・六十一歳、女性が十九・三十三・三十七歳をいい、この年齢の前後を前厄・後厄と称します。

この中でも男性・四十二歳と女性・三十三歳を大厄として、特に意識することが多いようです。

数え年では、新年を迎える正月に、新たに年齢を一つ重ねるため、年頭から節分までの期間に厄払いを行うことが多いようですが、これに関係なく誕生日などの良き日柄を選び、参詣を行う場合もあります。

本来厄年は長寿を祝う還暦（六十一歳）や古希（七十歳）などの年祝いと同じく、晴れの年齢と考えられていました。厄年を迎えることは、地域社会において一定の地位となることを意味し、神様にお使えする神役の「役」であるともいわれています。そのため、心身を清浄に保ち、言動を慎む物忌（ものいみ）に服す必要があったわけです。

現在では、災難が多く生じる面が強調され、その禁忌の感覚が強くなりましたが、七五三や成人式、年祝いなどとともに、人生の通過儀礼として、大切に考えられていることに変わりはありません。

年賀祭

年祝いと言われ、年賀の祝いのお祭です。普通四十二歳以下の年賀は行われていません。

四十二歳の賀　または四一の賀といって、年祝いではなく、むしろ男性の大厄に当たりますが、これをお祝いすることによって、禍を転じて福としようとするもので、この祝いは自分自身の力で祝うものとされております。

六十一歳の賀　還暦の賀、または、木卦復（ほんけがえり）の賀といい、これより上の賀は子がお祝いするものとされています。

七十歳の賀　古稀の賀。「人生七十、古来稀なり」の詩（杜甫「曲江」）より。

七十七歳の賀　喜寿の賀。「喜」の略字が七十七と分解できるため。

八十歳の賀　傘寿の賀。「傘」の略字（仐）が八十と分解できるため。

八十八歳の賀　米寿の賀。「米」の字が八十八と分解できるため。

九十歳の賀　卒寿の賀。「卒」の略字（卆）が九十と分解できるため。

九十九歳の賀　白寿の賀。「百」の字から一をとると白になる事から。

百五十歳の賀　天寿の賀。

俗に、百歳以上になれば天寿の賀を行っています。

報賽祭

これは解願（お願いほどき）とも恩礼（お礼詣）とか言われるもので、先に大神様にお願いしたことが成就したときに、その旨を奉告すると共に感謝と報謝の心を示す為のお祭です。

各種祈祷・祈願

その他、祈祷・祈願には、それぞれの人によって、病気平癒、交通安全、開運、家内安全、豊漁、受験合格、旅行安全、星祭など限りなくあります。

神様のご神徳を尊び感謝し、報賽報謝することは大切なことでありますが、この加持祈祷ということこそ、その字が示す通り「加」は神様の力が加わる、「持」は神のご威徳を人間の心に受け持つ、「祈」はいのる、「祷」

は乞い願う、ことを言い、ご神霊の中に溶け込んで、ご威徳を人間に拝移し、人間はそのご威徳を心の中に受け持って、願い事をお祈りして乞いまつるのであります。この祈祷こそが、我々崇敬者と大神様とが最も密接な結びつきを得られるものです。

祓詞

掛まくも畏き伊邪那岐大神　筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に　禊祓へ給ひし時に成りませる祓戸大神等　諸諸の禍事罪穢有らむをば　祓へ給ひ清め給へと白す事を聞食せと　恐み恐みも白す

神棚拝詞

此の神床に坐す　掛けまくも畏こき天照大御神　産土大神等の大前を拝み奉りて　恐み恐みも白さく

大神等の広き厚き御恵みを　辱み奉り　高き尊き神教へのまにまに直き正しき真心以て誠の道に違ふことなく負ひ持つ業に励ましめ給ひ　家門高く身健やかに　世のため人のために尽くさしめ給へと　恐み恐みも白す

大祓詞

高天原に神留坐す　皇親神漏岐神漏美命以ちて八百万神等を神集へに集へ賜ひ神議りに議り賜ひて　我が皇御孫命は豊葦原水穂国を安国と平けく知ろし食せと事依さし奉りき　此く依さし奉りし国中に荒振る神等をば　神問はしに問はし賜ひ神掃ひに掃ひ賜ひて　語問ひし磐根樹根立草の片葉をも語止めて　天の磐座放ち天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて天降し依

さし奉りき　此く依さし奉りし四方の国中と大倭日高見国を安国と定め奉りて　下つ磐根に宮柱太敷き立て高天原に千木高知りて　皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて　天の御蔭日の御蔭と隠坐して　安国と平けく知ろし食さむ国中に成り出む天の益人等が過ち犯しけむ種種の罪事は　天つ罪国つ罪許許太久の罪出でむ　此く出でば天つ宮事以ちて天つ金木を本打ち切り末打ち断ちて千座の置座に置き足らはして天つ菅麻を本刈り断ち末刈り切りて八針に取り辟きて天つ祝詞の太祝詞事を宣れ

此く宣らば　天つ神は天の磐門を押し披きて天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて聞こし食さむ　国つ神は高山の末短山の末に上り坐して高山の伊褒理短山の伊褒理を掻き別けて聞こし食さむ　此く聞こし食してば罪と云ふ罪は在らじと　科戸の風の天の八重雲を吹き放つ事の如く　朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き掃ふ事の如く　大津辺に居る大船を舳解き放ち艫解き放ちて大海原に押し放つ事の如く　彼方の繁木が本を焼鎌の敏鎌以ちて打ち掃ふ事の如く　遺る罪は在らじと　祓へ給ひ清め給ふ事を　高山の末短山の末より佐久那太理に落ち多岐つ速川の瀬に坐す瀬織津比売と云ふ神大海原に持ち出でなむ　此く持ち出で往なば荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百会に坐す速開都比売と云ふ神持ち加加呑みてむ　此く加加呑みてば気吹戸に坐す気吹戸主と云ふ神根国底国に気吹き放ちてむ　此く気吹き放ちてば根国底国に坐す速佐須良比売と云ふ神持ち佐須良ひ失ひてむ　此く佐須良ひ失ひてば罪と云ふ罪は在らじと　祓へ給ひ清め給ふ事を天つ神国つ神八百万神等共に聞こし食せと恐み恐みも白す

あとがき

近年、我々日本民族の信仰である神道にとっていろいろの問題が一部の心無い人たちにより取りざたされております。たとえば、津市の地鎮祭、山口県の靖国神社合祀反対、忠魂碑、総理大臣の靖国神社参拝、護国神社への玉串料等々の問題でありますが、これは神社神道を一つの宗教と見ることに、そもそも間違いがあり、神道は仏教やキリスト教のように教祖によって教義が説かれ、大衆を教化していこうというものではなくて、自然とか民族の祖先としての天照皇大神をはじめ諸々の神様を崇拝するもので、他の宗教とはいささか趣を異にする日本古来の信仰であります。

神社神道における神様と人間のつながりは、人間は神によって生まれたもので、我々は神様の子孫として、同じ血の流れを受け継ぎ、この世に二千六百年余りも生き続けている民族であるということです。

従って、我々が祖先の神様を尊び敬い、またご加護を願い、日々の出来事を神様に報告することは、我々が日常、父母に様々な事を願い、また、今日の出来事を話し、親や兄弟姉妹に感謝する事と全く同じ自然の姿であると言えましょうし、今の世の中でも、一家の中でこうした親子の関係が大切だどうと思います。

この冊子は家庭における様々なおまつりについて、簡単にその意味とか通常的なおまつりの仕方を記してみましたが、家とか地方には特別な伝統やおまつりがあり、それはそれなりに深い由緒もあることですから、そのまま尊重して行う事が最も奥床しく、最も意義あるものだと思います。

ここで、最も大切に思うことは、いろいろなおまつりをするに当っては、心身を清浄にし、誠心誠意、神聖な態度で神様を尊びお祈りするとともに感謝をすることで、こうしたおまつりによって、我々崇敬者と大神様のつながりが少しでも深まり、神社神道が人間としての誠の道であり、崇敬者の皆様方が神の子孫として、平和で多幸な人生を過ごすことにお役に立てればと願うものであります。